

■国際シンポジウム

「Desarrollo y Cambio Social de las Sociedades Prehispánicas en la Costa Sur del Perú」

(ペルー南海岸における社会の実態と変容)

山本睦 (国立民族学博物館機関研究員)

2014年2月16日(日)、国立民族学博物館 第4セミナー室において、国際シンポジウム「Desarrollo y Cambio Social de las Sociedades Prehispánicas en la Costa Sur del Perú」(ペルー南海岸における社会の実態と変容)が開催された。本シンポジウムの主催は、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表：関雄二)、共催は山形大学人文学部・科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」(代表：青山和夫)、および頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「ナスカ地上絵の学際的研究における次世代研究者養成とネットワーク構築」(代表：坂井正人)、協力は古代アメリカ学会であった。

地上絵で著名なナスカ社会(紀元前100年～紀元後600年)に代表されるペルー南海岸の先スペイン期の諸社会に関する最新の調査成果を、国内外の研究者から聞くことができる貴重な機会であったため、使用言語がスペイン語で同時通訳はなかったにも関わらず、参加者は23名と盛況で、非常に精緻で熱い発表と議論が繰りひろげられた。

発表者は、発表順にクリスティーナ・コンリー(テキサス州立大学)、マルクス・ラインデル(ドイツ国立考古学研究所)、ケヴィン・ボーン(パデュエ大学)、松本雄一(山形大学)、坂井正人(山形大学)の5名で、関雄二(国立民族学博物館)が総合司会を担当した。

近年のナスカ社会の研究に代表されるように、ペルー南海岸では活発な考古学調査が実施されている。そしてこれらの調査によって、当該地域の社会は、同時期にペルー北海岸に存在した社会とは大きく異なる社会過程を歩んだことが次第に明らかとなっている。

一口にペルー南海岸といってもその範囲は広大でアンデス山脈から太平洋にそそぐ河川によっていくつかの地区に分かれており、それぞれの地域社会の実態は多様である。さらに、ナスカ社会は、あくまでナスカ期というこの地域における一時代の人間活動の痕跡にすぎず、実際にはそれ以前から様々な社会が存在し、相互に関係をもちながらペルー南海岸の先史社会は展開してきた。

したがって、本シンポジウムでは、発表者それぞれの調査成果にもとづき、ペルー南海岸に成立した諸社会の実態とその動態に関する知見を深め、共有することを目的とし、権力と地域間交流を軸に周辺地域との関係も視野にいたした発表や議論がおこなわれた。

はじめに、クリスティーナ・コンリーは、約5000年間という長期間にわたって利用されたアハ川流域のラ・ティサ遺跡の発掘調査にもとづいて、ナスカにおける権力と社会変化の通時的変遷について論じた。次に、マルクス・ラインデルは、パルパ川流域において、ナスカ社会に先立ち、その権力形成の下地ともなるパラカス社会(紀元前800-200年)の動態を示した。また、ケヴィン・ボーンは、ナスカの大神殿カワチ遺跡のデータや多彩色土器の製作に関わる分析と、自身のイカ川流域の調査成果から、ナスカにおける巡礼の役割と権力について論じた。さらに、松本雄一は、ペルー南部高地アヤクーチョにおける形成期の神殿遺跡カンパヌック・ルミ(紀元前1000-500年)の調査データを用いて、高地社会の変化に際してパラカス社会の影響がみられるようになる現象に、神殿への巡礼モデルを用いた解釈を施した。そして、坂井正人は、リオ・グランデ川流域における調査成果をまとめ、地上絵と地上絵の中心点における活動の通時変化を論じたうえで、カワチ遺跡と地上絵を軸にナスカの文化的景観と社会像についての見解を示した。これらをふまえたうえで最後には、編年、生業、気候変動、巡礼、戦争などをテーマとして、パラカス、ナスカ、中期ホライズンという順に、発表者とコメンテーター、聴講していた参加者を含めてペルー南海岸諸社会に関する総合的な討論がおこなわれた。

以下は、各発表の概要である。

・クリスティーナ・コンリー

「南部地域からみたナスカ地域における権力と社会の変遷」

本発表は、ラ・ティサ遺跡の調査成果を中心に、とくにナスカ南部地域における先土器時代から後期中間期におよぶ通時的な社会変化、および権力および政治組織の形成過程を示したものである。

ラ・ティサ遺跡では、先土器期の狩猟採集社会に利用がはじまり、形成期からナスカ期に農耕に依存した社会が成立した。また、ナスカ期には、精製土器の顕著な利用や埋葬や居住域、儀礼的空間の明確化など建造物や考古遺物に変化がみられ、その立地を活かして灌漑施設を建設、利用するなど生業面においても大きな変化が生じた。この時期には、南部地域で人口増加やリーダーの権力性の顕在化など社会的政治的組織の変化が起こり、全体としてはカワチの大神殿を頂点とする社会的統合に組み込まれながらも、小規模な神殿を中心に多様な社会が存在したことが明らかとなった。さらに、ワリの影響がラ・ティサ遺跡の住居や埋葬にみられはじめると同時に、戦争の痕跡が多く確認されるようになること、後期中間期には対岸にパホナル・アルト遺跡が築かれるなど、ナスカの社会的政治的構造に変化が生じたことが示された。このように、ナスカ地域における社会的変化には、社会内外双方の要因が複雑に絡み合っており、この問題のよりよい理解のためには今後の調査の進展が不可欠である。

・マルクス・ラインデル

「ペルー南海岸、パルパ川流域におけるパラカス文化」

本発表では、パルパ川流域における集中的なセトルメント・パターン調査と複数遺跡の発掘調査から、パラカス期（紀元前 800-200 年）の動態が、中流域のみでなく、山間部においても明らかにされた。

草創期（紀元前 1500-800 年）の状況は不明瞭であるが、ペルニル・アルト遺跡ではパラカス先行期からパラカス早期（紀元前 800-550 年）への連続性が示された。パラカス期になると流域内の遺跡数が増加し、モリヤケ・チコ遺跡やハウランガ遺跡でパラカス期の活動が確認されている。この際に重要な点は、山間部においてもパラカス期の活動がみられることである。テラス状建築と D 字形建造物を有するコリャンコ遺跡やクタマリヤ遺跡、ワユンカリヤ遺跡、ラクダ科動物が飼育されたと考えられるピチック・プキオ遺跡の存在は、中流域と山間部を結ぶ地域間交流が活発に行われたことを示唆する。これらをふまえて、流域のセトルメントを考察すると、パラカス中期（紀元前 600-400 年）には山間部に遺跡の分布が多く、パラカス後期からナスカ早期、前期になるにつれ、次第に遺跡の分布が中流域へと移行することが明らかとなった。こうした山間部のパラカス文化の広がりについては、現在も調査が進行中であり、今後の成果が期待される。

・ケヴィン・ボーン

「ナスカ早期における巡礼と権力」

本発表は、巡礼をコストのかかる（犠牲や努力を必要とする）サインとみなす生態学に由来するモデルを用いて、ナスカ早期における巡礼と権力について論じたものである。

ナスカ早期には、ナスカの社会政治的、宗教的中心とされるカワチの大神殿が築かれ、そこにはリーダーが居住したと考えられている。カワチには多彩色土器の製作に関わる資料が存在し、他の居住遺跡で認められる多量の多彩色土器の胎土は、カワチの建材と同様の構成を持つ。また、巡礼の中心と考えられるカワチでは、楽器や織物、首級が確認され、広場では儀礼が執り行われたことが想起される。さらに、カワチで用いられたヘマタイトの鉱山では、楽器や多彩色土器が認められ、カワチの活動は気候が不安定な時期に顕著であるという。これらのことから、巡礼によりカワチに集まった人々が、神殿や地上絵の建設や製作、維持、そこでの儀礼にたずさわり、イデオロギーが物質化された多彩色土器を持ち帰ったという仮説が示唆される。また、巡礼を行うという行為は、共同体のエリートにとって自らの権威を高めるための重要な手段であった。この仮説をイカ川流域のセロ・ソルダードとセロ・トルトラ両遺跡の比較から考察すると、記念碑的建造物を有する後者では、ローカルな土器が多く、巡礼への

アクセスが限られていたことが想定される。今後は、仮説検証と社会構造の理解につながる発掘調査が必要である。

・松本雄一

「高地におけるパラカスーカンパナユック・ルミを中心に」

本発表は、ペルー南部高地のカンパナユック・ルミ神殿遺跡の調査成果をもとに、カンパナユック・ルミをはじめとした高地の社会変化とパラカス文化との関係を、巡礼モデルを用いて論じたものである。

カンパナユック・ルミは、I期（紀元前1000-700年）とII期（紀元前700-500年）にわかれ、II期になるとペルー中央高地のチャビン・デ・ワンタル遺跡やペルー南海岸におけるパラカス早期社会の影響が顕在化する。また、II期には、特殊な建造物や土器装飾、黄金製品や冶金関連遺物のほか、パラカスの土器や神殿の模型と考えられる石製品が出土した埋葬関連遺構が確認されている。さらに、カンパナユック・ルミが機能を停止する時期は、チャビン・デ・ワンタルの影響が消失し、パラカス前期から中期への移行期に相当する。ここで重要なのは、南部高地ではパラカス前期の活動が限定的であるのに対し、パラカス中・後期の活動はカンパナユック・ルミ以外の遺跡で確認される点である。この現象については、パラカス前期にはチャビン・デ・ワンタルの分社 (branch shrine) であったカンパナユック・ルミへの巡礼を介したインタラクションが存在したのに対し、パラカス中・後期にはそうしたシステムがなくなり、個々の社会が独自に交流したというモデルが示された。

・坂井正人

「ナスカのリオ・グランデ川流域における景観と社会」

本発表では、リオ・グランデ川流域、とくにナスカ平原における地上絵の時空間的位置づけ、およびその製作と利用に関わる人々の活動について、近年の学際的な調査成果を通じて論じられた。

具体的には、まず、衛星写真や3Dレーザースキャナーなどを用いた測量にもとづいて、新たに確認された地上絵についての報告がおこなわれた。次に、地上絵や地上絵の中心点における地表面での遺物採集とその分析にもとづいて、地上絵を用いた儀礼や儀礼で用いられたと考えられる土器の時期的変化が論じられた。地上絵は長期的な儀礼の対象であったと考えられるが、その活動が集中するのはカワチの大神殿で顕著な活動がみられるナスカ前期であることが示され、さらにナスカ川流域とインヘニオ川流域では、地上絵の中心点で確認された土器の器形に差異があることが述べられた。さらに、地上絵の製作に際して、カワチの大神殿とセロ・カレーラ、セロ・ポンクという二つの山が重要視されており、これらの関係にもとづいて、カワチを中心にインヘニオ川とナスカ川の流域に地上絵を含むナスカの文化的景観が築かれたことが論じられた。そして最後に、今後も展開される考古学、人類学、地理学などからなる学際的研究により、ナスカ社会の理解を深めていく重要性が指摘された。

(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

主催：国立民族学博物館

科学研究費補助金基盤研究 (S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」

(代表：関雄二)

共催：山形大学人文学部、

科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」(代表：青山和夫)、

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム

「ナスカ地上絵の学際的研究における次世代研究者養成とネットワーク構築」(代表：坂井正人)

協力：古代アメリカ学会